



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アイヌ語否定表現の語用論的研究：口承文芸テキストを中心に〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	Nurmi, Jussi Henri Sebastian
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16491号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94953
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Jussi_Nurmi_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名：ヌルミ ユッシ ヘンリ セバスティアン

学位論文題名

アイヌ語否定表現の語用論的研究 ―口承文芸テキストを中心に―

・本論文の観点と方法

本研究は、自然言語における普遍的な要素の一つである「否定」に注目し、アイヌの散文説話 (*uwepeker*) に現れる否定発話・否定表現を語用論的に分析する試みである。これまで、アイヌ語に関して語用論の観点からなされた研究は極めて乏しく、否定についての語用論的研究もほとんど行われてこなかった。アイヌ語研究は、今後のアイヌ語学習、教授、アイヌ語復興の発展を念頭に置く必要があり、アイヌ語のより深い運用面の研究が不可欠である。その点において、否定表現には、アイヌ語固有の発想や思考形式が色濃く反映されており、重要性の高い研究テーマの一つと位置付けられる。本研究では、否定の語用論に関する諸理論、談話分析・物語分析のさまざまな分析手法、他言語における否定表現に関する先行研究を踏まえたうえで、否定表現が物語の中で語用論的に重要な役割を果たしていることを明らかにした。

・本論文の内容

第1章では研究の背景と目的が述べられる。また、使用した言語データ、表記のような、内容の理解に必要な情報について解説する。

第2章では、研究テーマに関連している理論、否定の捉え方、物語や語り手の概念、そしてさまざまな否定の語用論に関するアプローチについて述べる。否定は伝統的に「非情報的」と見なされ、背景にある様相とされることが多かったが、否定がその枠を超え、背景ではなく前景に位置づけられ、ストーリー展開において重要な新情報を提供することのある点が指摘される。さらに、否定的な断定や否定が含まれる埋め込み文も否定表現として捉えるべきことを述べた。こうしたさまざまな否定構造の分析を通じて、アイヌの物語における否定表現の多様性や多機能性を明らかにしている。また、「物語」と「語り手」の捉え方についても検討する。

第3章では、「否認」という否定の基本的な発話的機能の一つを扱う。アイヌの散文説話における否認機能が確認できる否定のコンテキストを分析し、その理由や背景について論じる。また、定性的分析ばかりでなく、定量的分析結果も示す。

第4章では、否定表現の「対比」あるいは「コントラスト」という談話機能に注目し、ア

イヌの散文説話 (*uwepeker*) における否定の使用について論じる。

第5章では、評価という否定の基本的な談話機能と、それがアイヌの散文説話においてどのように使用されているかについて分析結果を述べる。特に、否定が持つ「対比」の機能に着目し、肯定文が明示されず、否定のみが現れる場合でも、前提や期待として認知的な対比が生じることを示す。

第6章では、アイヌの散文説話において、いわゆるストーリー否定あるいはストーリー展開 (*storyline*) に対して機能している否定の使用について論じる。具体的には、否定が表す「問題」と「非問題」および、コンテキストにおける詳細について説明するための「中立的な使用」、「モラル評価」および「要求」に相当する否定表現の機能を説明する。それにより、アイヌの散文説話において、否定表現はストーリー展開に関して問題や非問題、転換点、そして緊張感が高まったことを表示する機能を持つこと、また、登場人物が対話部分、主人公が語り部分で「すべきでない」ことを表すため、モラル評価として機能する否定表現を用いる傾向があることを示す。

第7章では、否定の平叙文以外の否定文、すなわち否定的な命令文、否定的な疑問文、否定の断定、および否定的な条件文を扱う。否定的な命令の多くは対話部分に現れ、物語のストーリー展開に極めて重大な影響を及ぼすこと、物語の結末部分には、その物語の趣旨をまとめるような否定的な命令が見られ、主人公が教訓を伝えているようなモラル評価を行うとともに、物語の要点をまとめる機能を持つことが示される。他方、否定的な疑問は命令と同様に、命題を否認するようには機能せず、間接的な要求、主人公の願望や心情などの表現に用いられることが指摘される。さらに、否定の断定はアイヌ語の否定表現においては頻度が比較的高い、という重要な指摘がなされ、主人公の存在を否認するものではなく、逆に主人公の性質を断定するというような重要なレトリック機能を持つことが示される。なお、否定的な条件文は用例がそれほど多いとは言えず、問題を残しているが、やはり評価的な表現であり、起こらなかった出来事が実際に起こった出来事と対比、強調される機能を持つことが示唆される。

第8章では、物語のさまざまな部分における否定発話について述べる。特に物語の冒頭部分および結末部分に注目し、さらに主人公の視点から伝えられる語り部分および登場人物のセリフから成り立っている対話部分のように物語の内容を二分して分析を行う。最後に、否定をレトリックとして扱い、誇張や強調、形態・統語的に明白に否定構造なのにもかかわらず、語用上では肯定的な意味をなす、あるいは最上級表現のように捉えられる否定発話について論じている。否定的な命令の多くは対話部分に現れ、物語の冒頭部分、途中、結末部分のいずれにも現れる。たとえば、冒頭部分に禁止が現れる場合、主人公が禁止を破って行動することが劇的なストーリー展開を可能にする引き金として効果的に用いられる場合があること、結末部分に禁止が用いられると、モラル評価を行うと共に、物語の要点をまとめる機能を持つことが示される。なお、結末部分における禁止の機能は、散文説話の種類により異なる可能性のあることを指摘し、否定表現の用いられ方がアイヌ文学のジャンル分けを考察する上でも有用な視点を提供するものであるこ

とが示唆される。

第 9 章では、全体のまとめと結論が述べられる。